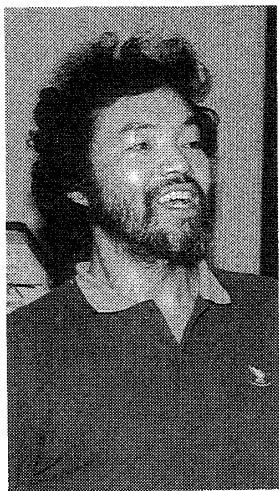


赤坂和雄

# 日本人の 海外旅行と外国語



手嶋兼輔

## 初めての海外旅行

赤坂…きょうは日本人の海外旅行と外国語というテーマでお話を展開させていただきたいと思っています。最近は海外に行く日本人観光客が爆発的な人気のように、特に円高、ドル安ということもありまして、非常にふえていま

昨年（一九九四年）一年間に海外旅行に出かけた人は史上最高の延べ一千三百五十八万人に達したことが、九四年五月十六日に公表された一九九四年度の「観光白書（観光の状況に関する年次報告）」で明らかになった。この数は前年度より一三・八％の増で、日本総人口に占める割合は一〇・九％で、十人に一人が海外に出かけた計算になる。特に昨年は円が一ドル百円を突破したこともあり、渡航者は一気に百六十四万人に増えた。出国者の内訳は男性が七百五十四万人、女性が六百三万人にのぼるが、二十一―二十四歳では男性五十六万人に対し、女性は百十九万人と二倍以上になり、女性の渡航熱の高さを示している。行き先で最も多かったのは米国で四百三万人、次いで韓国十五・五万人、香港九十六万人、以下中国、台湾、シンガポール、オーストラリア、タイ、インドネシア、イギリスの順になっている。

一方、日本に入国した外国人も多く、前年比二・二％増の三百八十三万人に登った。中でも韓国が百十四万人と最も多く、以下、台湾、米国、中国、香港、フィリピンの順でアジア地域からの入国者が七割を占めている。

海外旅行者はどんなパターンで、またどのような考え、目的で出国しているかを観察するのは意味あることと考え、「日本人の海外旅行と外国語」のテーマで論ずることにした。（資料（※）朝日新聞 一九九五年五月十六日 北海道新聞 一九九五年四月三十日）

す。ことしの夏は史上最高だったということがきょうのニュースでもあったのですが、そんなことも考えて、海外に観光客として日本人が流れて行き、いろいろな異文化に触れて、いろいろなことを学んでくるということは、大変いいことだと思います。しかし乍らいろいろな問題も巻き起こしているという話も聞

いているわけですが。きょうはそういうような問題とそれから言葉の問題、我々が海外に行ってその言葉というものをどれだけ自分が習得して理解をどれだけできるかなどを考えてみたいと思います。そして現地の人たちと実際にお話をして意見の交換、交流が果たしてあるのかどうか、そういうような問題も

あるのだろうと思うのですが、恐らくそこまでは普通の観光客にはないのかも知れないのです。きょうのお話は出来ればそういう理想でこれからの旅行を行っていければいいなという希望的な見方があるわけです。そういうようなことで、きょうのお話を進めていきたいと思います。

手嶋先生は海外旅行がたくさん経験があるわけなのですが、最初先生はギリシャに行ったというお話を伺っていたのですが、それは何年前になりますか。初めてギリシャに行かれたのは。

手嶋…私が初めて行きましたのは一九七一年のことです。札幌オリンピックが開かれた前の年になります。

赤坂…その当時に行ったときの海外での先生の感想と、それから今の先生の見られる海外というものの相違というのは、かなり大きくあるだろうと思うのです。そんなことも踏まえながら、いろいろな言葉とかマナーなど、それから我々の向こうでの体験というものなんかをお話していただければと思います。

私たちの場合は案外言葉の上では余り問題はないと思うのです。ただ、言葉の上で問題がないと言っても、もちろんないわけではないと思うのですが、普通の一般の観光客に比べればということです。私たちは現地に行けば必ず向こうの人達との交流がありますか

ら、相手国の言葉が出来なければ困ります。一般的に言ってしまうでしょうか。先生が長い間ギリシャに行っていたときいろいろな観光客が来たと思うのです。その人たちの行動の流れというもののなんかを見て、先生が異様に感じたこととか、「ああ、いいな」と感じたことなどがおありだとは思いますが、そういうようなことの体験はございませんでしたか。

手嶋…私、初めて行ったのは一九七一年だったのですけれども、そのころはやはり外国へ行くということが自由になりかけてから何年かたった後で、まだまだそんなに数多くの方が外国へ行ける時代ではなかったです。ですから、外国へ行くということがやはり特別な特殊な場合や人に限りという時代だったと思うのです。だからこそ私は外国へ行ったのかもしれません。今ですと、外国へ行ったことがないような人を探すのがかえって難しいというか、変わった人だなんていうちょっとした言い方もあります。私はへそ曲がりですから、日本にいたくないから外国へ行ってみたというのがあります。

### 個人旅行とバック旅行

それだけに、外国へ行く人にはそれだけの覚悟があったり、普通の人にはなかなかまだそれだけの余裕も気持ちもなかったかも知れ

ません。そういう点で今と違いは随分あるのではないのでしょうか。そして行動の上から見ますと、やはり旅行には基本的に言いまして二つの形があると思うのです。一つは個人旅行です。私なんかはその典型だと思うのですけれども、自分でいろいろ計画したり、資金も自分で用意したりして、何とか旅行も自分なりの手づくりのような形でやっていくようなタイプ。それは個人とは限らなくてもグループでもいいのですけれども、手づくり旅行みたいな感じですか。それとも一つはバック旅行という、これは用意された旅行の形があるわけです。そしてそこに入るということは、一つの流れの中に身を置くということですから、余り自分でいろいろ動かなくても乗っかっていけば自然といろいろな所も見学できるしホテルも泊まらせてくれる。そうした基本的に大きく分けて二つの旅行の形があると思うのです。

それで、私は初めから自分なりの旅行がしてみたいわけですし、どうもバック旅行というのは向いてません。今に至るまでほとんど一人で旅行してきますけれども、その違いというのがかなりあるような気がします。結局よくも悪くも一人で、あるいは自分たちでやるということは、いろいろな意味で面倒で大変なのです。

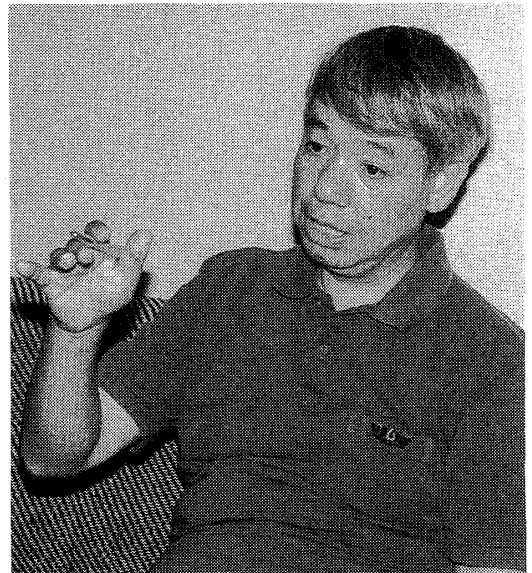
例えば、ホテルも自分たちで探さなければ

いけない。汽車の切符とかバスの切符も自分たちで手配しなければいけない。何から何まで結局は自分たちでやる。そうするとその場合に言葉も必要になってくるわけです。それから日本では習慣が違っても、その国ではその国なりのやり方というのが、切符一枚買う場合でもあるかもしれません。何から何まで自分たちで考えてやらなくてはいけない。そういう一切の面倒を抜かしたのがバック旅行です。もう本当に極端な話を言えば、外国語をほとんど一言も使わないでもすべて用意されて、要領よく短期間の間に見学できたり回ることができたりする。そういう非常に効率のよい旅行の形だと思います。

ですから、その二つの旅行のどちらを選ぶというところで最初に選択があるのではないのでしょうか。

赤坂…そうですね。面白い指摘だと思います。個人旅行それから団体旅行といいますが、バック旅行の二つということになりますね。ただ先生が七十一年に行かれたときは個人で行かれたわけですね。その当時ですと、まだまだ団体旅行の最盛期だったのではないですか。個人旅行というのはそんなに盛んな時代ではなかったと思うのですけれども、どうでしたか。

手嶋…でも若い人たちはやはり私なんかも含めて一人旅というのですか、自分で行きたい



という気持がありました。シベリア経由でヨーロッパへ行くというのが、そのころのゴールデンルートみたいな感じであったり、あるいはアジアの方を回って中近東とか、あるいはインドを回ってヨーロッパへ行くとかいうふうな形でした。主にこれは若い人ですけれども貧乏旅行の代名詞みたいなもので個人旅行でした。全体としてはグループ旅行が多かったですけれども、それは今でも大体変わっていないのですか。大半の人はやはりツアーで行くような人が多いです、当然。

### 日本人観光客のパターン

赤坂…圧倒的にツアーでバックで行くという人たちが多いわけですね。先生が七十一年に

行かれていた時は、向こうにはいわゆる日本人のバック旅行がたくさん来たと思うのです。バック旅行で来ている人たちをいわゆる先生が外から眺めていて、何か異様な感じを受けたことがあったり、何か変だなと思うようなことを感じたことありませんでしたか。手嶋…ありますね。これはいろいろな例があると思うのですけれども、例えば私ギリシャにしまして、ガイドみたいなこともちょっとやったことあるのです。アテネにアクロポリスという観光名所があります。そこへ日本人のグループを連れてってパルテノン神殿の説明をしたり、そんなこともちょっとアルバイト的にやってみたことはあるのです。そういうときに日本人の団体客とアメリカ人なりドイツ人なり、ほかの国の団体客との比較なんかも当然目に入るわけです。そして、いろいろ考えるのですけれども、日本人の団体客というのはやはり異様なところがあるんですね。ご想像のとおり、大体三十人のグループいまして、これは平均的な場合ですけれども、五人ぐらい、多くて十人ぐらいは説明聞いてくれるのです。私が一生懸命説明するわけですが、このパルテノン神殿は紀元前五世紀に、アテネの民主制の一番盛んな時期にペリクレスが命令して造ったのです。そういう話を一応ガイドですから説明します。そうすると五人から十人ぐらいの人は私の近くにいて、それで

も一生懸命聞いてくれます。しかし残りの二十人とか他の人たちはやはり聞いてないので、ほとんど。ぱちぱち写真を撮るし、説明中でもどこでも行って自由に自分なりに見て回る。次のところへ行くと聞いてくれる人はもつと少なくなっていく、最後は二、三人の人だけがついて来て、一生懸命聞いてくれる。大体日本人はそんな感じです。

しかし、例えばドイツ人というのはいつでも思うのですけれども、ものすごく勉強熱心なのです。みんな食い入るように説明を聞いているわけです。一言も聞き漏らすまいと、中にはメモなんかとって一生懸命聞いています。ドイツ人というのは一番そういう意味では勉強熱心で真面目です。やはり日本人というのはそういう意味で、何しに外国に来るのかというところがいまひとつ違うような気がします。

それと、結局土産物です。土産物屋さんでも私ちょつとしたことあるのですけれども、日本人の観光バスが止まっておりてきます。もう店内が大変に活気づきます。お店の人もさあ商売だというわけです。手ぐすね引いて待っているのです。それで「高い」とか「安い」とか言って、「まけてまけて」とか「ディスカウント」とか、そんな言葉がもう飛び交いまして、大変な買物になるわけです。安い小さいものを二十個も三十個もお土産に買い

込むのです。そういうことは外国人には決してあり得ません。本当に財布の紐はかたいし、買うときはいいものを一つか二つ買うかもしれないかもしれませんけれども、ほとんど買わない。日本人は商売のためには非常にいいお客さん。ですから買物と写真というのは、どうしても日本人の観光客にはついて回る、特殊な例だと思えます。異様といえば異様かもしれませんが。赤坂・名づけければ日本人観光客のパターンです。典型的なパターンと言ってもいいかも知れませんね。

手嶋…それは今でも余り変わらないのではないのですか。

赤坂…恐らく変わらないと思います。やっぱり日本人観光客が多いと言われている、その行かれる人たちがリピートして行っているという人はまだ少ないのです。ですから、初めて行ってそれで終わるという人たちが圧倒的に多いと思うのです。もちろん正確な調査結果というものは聞いてませんけれども、どうなのでしょう。生涯初めて行ってこれで終わるという旅行ですから。そうするとやっぱりお金もたくさん持っていて、できるだけいろいろなところに短期間に飛んで行って、とにかくヨーロッパの主な国々、そして主要都市をぼんぼんと歩いてくるという、飛行機で飛んで歩くというような、そしてヨーロッパへ行って来たと思っっているのです。買物

もいっぱいしてくるというようなパターンは、やっぱり今もまだ変わってはいないのではないかと思います。七十一年の最初のころという、今から何年前になりますか。

手嶋…二十三年ぐらいになりますか。

赤坂…二十年前とは余り変わらないというところでしょいか。ですから、二十年前に初めて行った人も、今初めて行く人にとってもその辺は余り変わらないところかもしれませんね。

### 旅行の期間

手嶋…日本人の一つの旅の形というのがあると思うのです。それは物見遊山という言葉がありますけれども、出かけて行って遊んでくるわけです。基本的には遊びですから、何か一生懸命知識を仕入れようとか、勉強してこうとか、身につけようとかということではなくて、やはり遊びだからそういうことにならぬのではないでしょう。それはそれで仕方がないのかもしれないと思うのですけれども、赤坂…そこら辺を我々は責めるつもりはないのですが、これは外国人はどうなのでしょうね。

例えば京都なんかに行きますと、外国人が群れをなして旗の下を歩いているという光景を見たことがあります。それはたくさんあるわけではないとは思いますが、かな

たようなパターンになるのでしょうかね。

あともう一つ、期間の問題もあります、色々な理由があるにせよ日本人の場合は、本当に短く一週間かせいぜい、十日くらい。最近長期型なんていうことも耳にするようになってきてはいますが、果たしてそれがどの程度の長期ということかはわかりません。今までよりちょっと二、三日長い旅行であれば長期になっていくのかも知れませんが、その辺のこともありますし。それから海外から来る人達、例えばアメリカとかヨーロッパ、それからオーストラリア、ニュージーランドなんかの人たちが日本によく見えてますけれども、その人たちの滞在期間というのは、日本人に比べると随分長いです。この間も先生の知っておられるリチャードさんが来たときも彼らはやっぱり日本に來ると一週間ではお金を捨てるようなものだという観念を持っておられるのです。

ですから、どうせ日本へ行くのだったら三週間、四週間、五週間ぐらいの滞在を考えて来るわけです。そういうことを考えていくとこれは日本のパターンとはかなり違うということが言えるのではないかと思うのです。

手嶋…その期間というのは、海外旅行において私は非常に大事だと思ってるのです。しかし、現実問題としての日本人、特に仕事を持っておられる方にとっては、いわゆる一

月とかそれ以上の期間、仕事から離れて旅行に出かけるといのは難しいです、非常に。

せめて一週間とか十日前後だったらどうか今だったら休みもらえるかもしれないということ、そのぐらいのいわゆる短期間ということにならざるを得ないのかも知れません。そうした諸条件を無視しまして、ひとつ期間という問題を考えると、私はやはり少なくとも三週間というのが必要なのではないかと経験上思ってます。それはこれまで学生を連れていたり、自分でいろいろな旅行をして来た経験から割り出したものなのです。この前もことしの三月に学生を連れ、社会人の方もその中に入ってもらって、ギリシャへ三週間行ってきました。

赤坂…同じところですか。ギリシャだけというところ。

手嶋…ギリシャの国の中です。それだけで動いたり一カ所に滞在したりしたのですけれども、初めの一週間というのは、なかなかその国になじまないわけです。なれるまで一週間のはかかるのです。それで二週間目になりますと、慣れはじめてくるというか、落ち着いてくるのです。ギリシャという自分にとっての未知の国が次第次第に自分の居場所として自分の中に住みついてくるのでしょうか、そういうのがあるわけです。それで三週間目やっと

非常に自分とギリシャがしっくりしてくるわけです。それで動きが自由になってくる。自然に振る舞えるというのでしょうか毎日を自由な気持ちで送れるようになるというのは三週間目なのです。それでちょうど三週間が終わった時点などというのは、もう帰らなくてはいけないのですけれども、「いやー残念だな、もう少しいたいな、せっかく楽しく過ごせるようになったのに、ここで帰ってしまうのは非常に残念だ」という気持ちになるのです。

三週間ないとなかなかそういう気持ちにはなれないような気がするのです。ですから一週間で帰ってしまうというのは、その国になれてもいないし、ただ何日間過ごしたただけで、まだ日本をひきずったままにいるという感じがするのです。

赤坂…そうですね。それにジェットラグ、時差ぼけというのがありますね。人によっては若い時代は先生どうだったでしょうか。時差ぼけというのはその克服というのは、若い時代というのはそんな大きな問題としてなかったかも知れないのです。ところが年をとって来るに従って、この時差ぼけの時差の違いというのは、大きく、その人を左右するだろうと思うのです。

例えば、私なんかはまだそんなに大きな感じはないのですが。先日カナダから来た友達

が、まず一週間以上時差ぼけが続き夜中に何回も目をさましてしまつて悩んでいました。彼なんかは割と旅行なれしているというふうには私は思っていたのにもかかわらず、彼は時差ぼけの征服が難しいようでした。

ですから、今の先生のお話の中にありましたように、一週間、十日、いや十日だつて僕には決して長い旅行にはなりません。ですから考えてみると、一週間ぐらいで行つて帰つてくるというのは、時差ぼけの中で、日本をひきずつたままで行つて、そして日本に帰つてくるというような計算になりませんか。

手嶋…なりますね。まさに「日本をひきずつたまま」という表現のとおりだと思います。ですから、結局一週間では、本当の意味では外国に足を踏み込んだという感じがしないので、ただ上面を通り過ぎただけで、また日本にそのまま帰つてきてしまったのだという気がしないでもないですね。どうしても三週間とか一月いて、ようやく何か外国の雰囲気を感じたのだということが言えるのではないでしょう。か。期間というのは、そういう意味では非常に大事だと思います。

### 苦勞する旅を

赤坂…そうですね。そこら辺が日本人の観光客を連れていく旅行代理店の人たちには、どの程度考慮して計画を立てておられるか、そ

の辺がちょっと疑問なのですが。もちろん日本人の忙しきということ、そんな長期間の旅行なんか出来っこないわけでしょうから完全に無視しなければならぬのでしょね、その部分は。日本時間を持ったまま日本を出てそして帰ってくる人もいるでしょう。あるいは二つの時計を持つて行つて、これは日本時間だよと、常に日本を振り返っているようなことも多いようです。実を言えば、私もそういう経験があります。そういう旅行の仕方だと、これは決してハッピーではないと思います。

そういうことを考えると、もう少し観光旅行のパターンというものをとつと実のあるものといえますか、物理的・身体的なものがありますから、そういったことも考えたパターンに持つていかなければ、本当の実のある旅行は出来ないのではないかという気がするのですけれども。

手嶋…しかし、観光旅行といつたらその程度かもしれないのです。いわゆるサイトシーイングのための旅行でしたら、一週間でも本当はいいのかなという気がしないでもないですね。ですから、単なる観光目的の旅行なのか、それとも少しは海外を知りたいのだと、海外で本当の経験をしたいのだと、そういうのはまた少し違うのではないのでしょうか。

それで、私が先ほど言ったのは、そういう

意味での海外経験とか海外を知る、あるいは外国の人と知り合う、そういうためにはやはりある程度の期間が必要になってくるし、個人旅行というような旅の形もどうしても要求されるのではないかと、ということなのです。

赤坂…先生は先程個人旅行とバック旅行の二つに大きく分けてお話をくださったのですけれども、一般の日本人を対象に考えたなら、個人旅行というのは非常に難しいのではないですか。一番難しく感じるのは恐らく言葉ということで問題を感ずるわけでしょう。そうすると、自分は西も東もわからないところで、どういうふうに飛行機に乗ったらいいのか、我々だってアメリカの空港へ行つて降りた所から今度乗りかえるのにどうやっていくかという一つのこつがあります。そういうことは我々だって何回も経験しているからそういうことが何となくわかつてきているわけです。手嶋…そこで、一つの提案なのですけれども、私が一番いいと思うのはその仲間です。グループで行くのですけれども、その中身は個人旅行的なもので、いわゆるフリープランとか、自由に自分で動けるような余地も残しておく、そういうような形の間タイプ、それが最初としてはいいのではないかと思うわけです。おっしゃるとおり、最初から一人でほっぽり出されたらそれはまごつきます。まだ若かつたし向こう見ずだったから、行き当たりば

たりで何とか生きてこられましたけれども、みんながみんなそういうことは不可能かも知れませんか。

赤坂…まず九九%まではそれは難しいのではないのですか。

手嶋…そうですね。それはまずひとまず置いておいて、何とかバック旅行ですべて仕上がつているような形ではなくて、自分でも何とかしなければいけないような余地を少しでも残しておいて、そういうような海外旅行を少しでも日本人が体験してもらいたいなと思います。私は学生によく言うのですけれども、「バック旅行で行くのなら行かない方がいいよ」と、それは私は本当に思うのですけれども、ああいうような出来上がりの旅行にのっかって何も苦勞しないで行って、外国がわかったというような言い方をされるのが嫌なのです。さもさも自分はどうヨーロッパを見てきた、アメリカもこんなことだよと言うわけです。「シンガポールはこうなのだ、実はね」とか、何かさもさも二、三日見てきただけで、すべてが分かってしまうようなことをいう人がいるのですね。

赤坂…ですから、僕は時々金魚鉢を例にとるのです。金魚鉢に入った金魚がそのままの形でヨーロッパを歩いて来たのです。そしてずっと回ってきて帰ってくる。これは今の先生のお話の別な表現の仕方になります。例えば



金魚鉢に入っていた金魚がヨーロッパのどこかで、例えばアテネあたりでびよんと飛び出て歩いたと仮定します。自由行動ですから好きなようにと言われても、「あつ、水がない」と言ってもまたあわてて金魚鉢に戻ってくる。これはそういうようなことに例えられると思うのです。

乱暴な言い方をすると、金魚鉢に入って回ってくるくらいならば、テレビで海外旅行の解説つきのテレビを見ていた方が、もっと効果的で良くわかるような気がする。これは一つの見方なのですが、そんなふうに思われても仕方がないと思うのです。

手嶋…そうですね。それで先生おっしゃったように、言葉が非常に必要とされるから、な

かなか日本人は自分とかグループだけではいかれないというのは当然あると思うのです。不安はだれもが持っている。しかし、やはりこれもいつも思うのですけれども、初めからできる人はいない。そうすると一生懸命勉強し言葉に十分自信を持ったと、私はもう大丈夫だと、そういつてから果たして外国へ行くのが正しいのかどうか。でもそんなことは逆に言ってもあり得ないのではないのでしょうか。ですから、まだ十分ではないし不安は残るけれども、とにかく先に行つて外国で練習するつもりで行けばいいのではないのでしょうか。言葉が不自由だから行けないというのはなくて、不自由だから行くのだと私は逆に思うわけです。それで外国に行つてそこが練習の場となるのではないのでしょうか。

### 移動型から滞在型へ

赤坂…言葉についてはもうちょっと後にいろいろと先生のご意見も聞きたいし、話し合いたいと思うのですが。もうちょっと今の個人、団体にしてもそれらの旅行の期間について考えてみたいのですが。長期型のしかも移動型でなくて滞在型の旅行が、最近何となくふえてきているという話を聞いているのですが。今までは移動型の旅行だったのです。例えば、一番びっくりしたのは、私がアメリカにいたとき友達が訪ねてきたのです。アメリカのニ

ニューヨークに。そのとき大金をかけてアメリカ、カナダ一周旅行という長期にわたる旅行のようにきこえました。しかし十日間だということです。当時としては十日間の旅行と言えば結構長い方だったのかも知れません。一九八一年の話なのですが。アメリカをほんぽんと飛んで、遂にニューヨークへやってきまして、それから今度はナイアガラフォールズに行きまして、ナイアガラからトロントへ行つて、そして今度はトロントからモントリオールへ行きまして、モントリオールから真つぐロサンゼルスへ飛んで行き、そして日本に帰るというすさまじい旅程でした。ああいうのを見ていて、当時でもやっぱり五、六十万はかけていたと思うのです。

ですから、ああいうのを見ますと、一体何をしに来たのだろうかという気がするのです。ニューヨークも一泊なのです。夕方、ニューヨークに着いて晩御飯食べて、ちょっとニューヨークの町を案内しましたけれども、翌日は早朝にナイアガラ滝へ飛んで行くわけです。そういうような旅行が今までのパターンだったのではないかと思うのです。これはアメリカ全土、それからカナダを入れての旅行でしたけれども、ヨーロッパだって同じようなことをやっているのではないかと思うのです。

最近はずだんだんと旅行の移動が萎められて

きたというか、狭められてきたというか、そういう形にはなってきたと思っています、今は。最近では少しは良くなってきたと思うのです。ただ、前述のようにあちこち飛んで歩いたその移動型の旅行のタイプというのは、ダイジェスト版ということで、外国の空気に触れるというようなことで行われるのかもしれない。その意味ではいいかも知れませんが。あすこはこうだった、ああだったというような意味ではよかったかも知れません。今度また来るためにという意味があるのかも知れませんが。一カ所とは言いませんが、最近はそのような移動型から滞在型という、今まで一晩しか泊まらなかったものを二晩、三晩泊まって、また移動するというような旅行のパターンができ上がってきているのです。

手嶋…おっしゃることよくわかります、結局日本人の日常的生活パターンをそのまま外国に持っていくような気がするのです。忙しいわけですが、我々せわしく毎日毎日移動して暮らしているようなものです。

だから、外国旅行をしてもやはりそのままのペースで、毎日忙しくしてないとか何かもつたような、時間のロスみたいな感じがするのではないのでしょうか。いかにニューヨークが気に入ったとしても、ここに三日は長過ぎるのではないのかという感じがします。例えば二日でもいいよ、一日でも見れるのだからそれ

だけで回ってしまおうとか、結局何かそうした忙しさが根にしみついていくというのでしょうか、そこから抜け出られないような気がします。それで時間を精いっぱい使おうと、朝から晩まで使い切ってしまうとするのですね。何か動いていたり何かをしている時間というのが充実した時間であって、のんびりとゆっくりと何もしていないでいる時間というのは空白で、ロスなのだという考え方があります、我々には。終日午後があいたと、それではもうゆっくりしようというふうに考えるか、たまたまあいたからそれではたまっている仕事この間にやっちゃおうとかありますね、日本人には。ですから、それがそのまま外国旅行なんかにあつて、せわしくせわしく動いてないともつたいたいか、気が済まないというのがあるのではないのでしょうか。その辺私は余り変わっていないような気がするのですけれども。

赤坂…そうですね。先生もご存じのニューヨークのタウランガのマウントモンガヌイは観光のリゾートとして有名な所なのですけれども。そこで一度びっくりしたことがあるのは、とにかく観光客が来るわけです。もちろんそれは外国人ではなくてニュージーランド人が自分のキャンピングカーでやって来て、車の中で寝たり、あるいはテントを張ってそこで一時的な生活をするのです。電気とか水



もあるわけです。向こうのキャンプ場という

のはすべてそういうものが完備しているので  
すね。そこは海岸でした。キャンピングカー  
でやって来た人たちは一体何をしているのか  
を観察すると、散々五々砂浜に寝そべって新  
聞や本を読んだりしているんです。要す  
るに先ほど先生がおっしゃった日本人にとっ  
てはむだと思われる時間をそこで過ごしてい  
るわけです。あれを見た時「はあ、彼らの  
時間の過ごし方というのは、こういう休暇の  
取り方をするのだな」ということがわかった  
わけです。何の予定も作らず、自分の好きな  
小説を読むとか自由勝手に過ごしているん  
です。車の中を見ますとテレビがあり、キッ  
チンがあって、そしてマイクロウェーブもある  
のです。ああいうのを見ていますと、やはり  
日本人のパターンとはかなり違うのだなとい  
うことがわかるのです。

### ギリシアでの三週間

手嶋…そういう意味でも期間というのが必要  
になってくるし、それが重要な要素になって

くるのではないでしょうか。一カ月間という  
期間があれば、そんなにいつもいつも動いて  
ないである程度のんびりと過ごせるかもしれ  
ないけれども、それが七日間ぐらいですと、  
やはり一日一日やることを決めて、朝から晩  
までスケジュールに従って動くようになりま  
す。

例えばの話ですけれども、先ほどちょっと  
お話しましたように、私たち三週間ギリシャ  
に行きました。そのときには私の好みという  
か、考え方ですけれども、余り動くのをやめ  
よう、今の話の流れの延長ですけれども、結  
局たくさん動いてたくさん見ると印象が混乱  
してしまいました、どこで何見たのかわから  
なくなる。それで忙しくて疲れたという印象  
ばかりがたまっていきます。そういうのは  
やめようではないかというのを、初めにみん  
なで話し合います、のんびり見ようではな  
いかと、スケジュールはゆったり作ろうとい  
うことを基本の一つに置いたわけです。その  
スケジュールも全部自分たちでつくっていっ  
たわけです。

例えば三週間ありますから、最後の一週間  
はもう動かないで一カ所に滞在型で行こうと  
いうことをまず決めたのです。クレタ島の南  
岸のマタツという小さな町です、そこにあの  
とき五泊しました。そこをベースにして、毎  
日ある程度フリーですから、みんな思い思い

に過ごします。何もしないでホテルでのんび  
りしていてもいいし、絵をかいてもいい。行  
きたければバイクでも借りて動いてもいいと、  
そういうような過ごし方をしたのです。

ですから、それはやはり今から振り返って  
見ると非常に印象に残る一週間だったわけ  
です。そのクレタ島というのが本場に自分たち  
の中に住みついて残るのです。それが例えば  
一日しかないで別のところへ行ってしまう  
たら、全然それは残らなかったかもしれない。  
けれどもゆっくりできたし、本場にその場所  
の空気とか自然とか、そういうものを毎日毎  
日味わうことができたのが非常によかった。

ですから、そういうふうなタイプの過ごし  
方というのが、やはり本当に海外に親しむと  
いうか、日本にないものに直接触れるとかい  
うためには必要なのではないかと思うのです。  
赤坂…これはもちろん日本人の忙しさとか、  
一生に一回しか来れないのだというようなこ  
とからすれば、大変なことになるのです。何  
を言ってますか、大金をかけて来ているん  
ですよ。出来るだけたくさん写真を撮りたい。  
写真を撮っておけば国へ帰ったら説明できる  
のだと。ここに行ってきたという証拠を自分  
のカメラに収めたいと考えるのです。それは  
考えてみると、日本人の宿命と言えるのかも  
知れませんね。

手嶋…でも日本人も少し精神的に豊かになっ

ていかなければいけないわけだし、やはりそれはどちらかというと、思考的に貧しいような気がするのです。

ですから、何回も何回も繰り返し返して海外旅行もしていく間に、少しずつゆとりも出てくるのではないかと私は思うのです。やっぱり海外旅行などというのは一つのゆとりの産物なのですから、そこまでさもなくやっついていなくても、いいというふうに日本人も思い始めるのではないのでしょうか。そのうちどうなのでしょうか。

## ニュージーランドでの トレッキング

赤坂…でもそんなにリピートできるわけではないのでしょうか。ただ、今の若い人たちにとっては今始まったわけですから、その人達は、あそこよかったらもう一回行こうという気持ちになると思うのですけれども、年をとった人たちが初めて海外旅行するとなると、もう一度来ようなどというのは難しい要求だだと思います。

ですから、先生がかつて何年か前にニュージーランドでトレッキングをして来たあの話を聞いて、随分うらやましいと思ったことがあるのですが、今でもそう思っているのです。一度やってみたいとは思っているのですが、ああいうトレッキングのような旅行のパター

ンというのですか、そういったものは日本では余り聞いたことがないのです。あれは出発して何日間ぐらい歩いたことになるのですか。

手嶋…ミルフォード・トラックというあれは四泊五日ぐらいの、それこそ一つのバックには違いないですけれども、自由に歩いて宿なんかは一日の行程ごとに決まっていますのです。

定員が毎日二十五人とか三十人とか決まっています、それ以外は一切入れない。申込みして満員になったらそれでおしまいみたいでした。私も日本で行く前からパンフ類などちょっと見てたものですから、靴だけは用意して行ったのですけれども、向こうへ行ってから申し込んで行きました。

赤坂…トレッキングのメンバーに入れていただけでラッキーでしたね。何か随分混んでいたそうですから。

手嶋…あのトレッキングは非常に世界的に有名なトレッキングのコースですから、もうアメリカからもカナダからも、それこそ日本からも随分参加する人がいて、インターナショナルなグループが出てきます。

赤坂…あのときはどこからスタートしたのですか。

手嶋…あのときはテ・アナウという湖のほとりの町からです。そのホテルに集合するのではなかったですかね、最初は。それで、最後がミルフォードサウンドまで行きます。すば

らしい散歩道にハイキングコースがついているようないいところでした。

赤坂…あのときは確かコースの中には山の屋根を歩く部分はなかったですか。

手嶋…ありますよ。

赤坂…たまたま私も飛行機で、小さな飛行機だったのですけれども、ミルフォードサウンドからクイーンズタウンに戻るとき、その尾根づたいを歩いている人を見たのです。だから、ああこれがかつて手嶋先生が歩いたコースなんだ、この中に先生もいたのだなと思いつながら見たのです。はっきり見えたのです。ちょうど山の上を十人ぐらいの、もつといたかもしれないですね。人がぼつんぽつんと一生懸命歩いているのです。

ああいうのを見ますと日本ではとすぐ考えてしまうんです。例えばああいうコースを日本のどこかに置き換えることできませんか。どこかにそのようなトレッキングコースを作るといふようなこと想像できませんか。

手嶋…できます。

赤坂…問題は宿泊の設備とかさういったこともあるでしょうけれども。例えば札幌から洞爺湖に向かって、洞爺湖のどこかをずっと歩いて、三日か四日かけて戻ってくるとか。

手嶋…考えればそんなに難しいことではないかと思えます。コースを作って整備して、宿泊施設をきちんとして。それで大事なことは

やはりニュージーランドという国はあるときも感じたのですけれども、大変に自然環境を大事にしているわけです。人数制限をするというのもその一つですけれども、橋を一つ造る際にも本当に自然を破壊しないように造っているし、人に対する配慮も行き届いているのです。

例えば、私はびっくりしたのですけれども、つり橋を造るわけです。それも自然の環境を守るために木の板を張りめぐらせた、一回に大体一人が渡ればいいのだと、そんなに十人も二十人も同時に渡る必要ないと、それでそういうふうな橋をつくるのですけれども、そのつり橋の木は雨が降ったりするとぬれます。つるつるしてぬるぬるして滑る。ですからそういうところに木の板の上に針金を渡すのです。十文字になったような。そうするとそれが滑らない工夫になっている。安全性のためだと思ふのですけれども、そういうような配慮にも驚きましたね。細かなところでは一つ一つの標識の図案なんかもそうです。何気ないものですが、非常にデザインなり配慮が行き届いているのでないでしょうか。ですから、そういうふうに自然を大事にしながらか、人々が気持ちよくかつ健康に歩けたり楽しめる、そういうのが日本にもあったらいいですね。

## 日本に作ろう歩く道

赤坂…今では日本でも随分歩くことが盛んになってきていると思うのです。そうといったものを観光産業の一つとして考えても良いのではないのでしょうかね。海外ではどんなふうになっているのだろうかというような研究も必要です。それを真似するというのではないのですが、その変形でもいいわけです。日本人に合ったものをそこに作り出していくというようなことでもやってもらえると面白いのではないですか。

手嶋…ただそれはやっぱり短いのです、日本人がつくると短い、距離が。一日コースで終わってしまうわけです、何時間とか。せいぜい四、五時間歩いておしまい。

赤坂…一週間にはならない。

手嶋…三、四日にもならないのです。ですから、その辺がやはり基本的な違い。先ほどから期間、期間と言ってますね。やはり四日間かけて歩くというのは、それだけ何かやったという感じがするわけですね。ここからここまで歩いた、距離にしてせいぜい四十キロもあるかないかだと思ふのですけれども、それでも四日間とにかく歩くわけです、寝泊まりしながら。一つの達成感があるのです。それもそんなに一日十時間も十二時間も歩かない、せいぜい一日六時間ぐらい歩けば大丈夫なコ

ースでやっぱりゆとりなのです。ですから日本人だとそこまで長く考えられないで、せいぜい一日のコースで日帰りとか、その辺の発想がまだまだ違いますね。

赤坂…例えば達成感を味わうために、札幌の自分の家から千歳まで歩いてみる。千歳までは四十キロぐらいです。四十キロぐらいだったら一日で歩ける距離だと思うのです、大体、そうすると、かなり疲れると思うのですが、千歳で一晚泊まって翌日は苫小牧まで歩いて行く。苫小牧まで歩いていって今度は室蘭まで歩いていく。たとえば到達点を伊達にする。あそこに温泉があれば温泉に浸って、翌日車か、バスで帰って来るというような、そういうようなことをしたいと思っているのですけ



れども。ただ残念なことに多くの場合歩く道がないのです。車の通る道はあるのですが。行政の人たちにこんなことも考えてもらえれるといいなと僕は思うのです。

手嶋…それにつけ加えるとすれば、もし作られた際の公衆道徳の問題だと思えます。絶対日本人の通った後はごみくずや缶くずやらどこでもあふれているでしょう。あれはそういうことがあつては、もう作った甲斐がないような気がするのです。

ですから、そうした歩く人のマナーというのでしょいか、それも合わせて、そうした所でしっかり教育できるようにすればすばらしいと思うのです。

### ネパールで話した英語

赤坂…話が海外旅行から国内旅行の部分みたいなところまで入ってしまったのですけれども、それはそれとして海外旅行問題として外国語というものを考えてみたいと思うのですが。例えばアメリカならアメリカへ行くときのその国の言葉とか、ヨーロッパならヨーロッパ、ここには言語がいっぱいあるので困るのでしょうか、少なくとも一つの言語というものを果たしてどの程度まで問題にして、そして学習をしているのか、全く問題にしないでやっているのかというような問題もあるわけなのですけれども、その辺からひ

とつ先生の考えていることを聞かせてもらいたいのですが。

手嶋…身近にあった一つの例をお話しさせてもらってよろしいですか。私どもの大学の先生のお一人がこの夏学生たちを十五人ぐらい引き連れてネパールという国へ一カ月ぐらい出かけてきたのです。つい先日戻ってからお話をいろいろ伺ったのですけれども、その先生は英語の授業も受け持っておられて、非常に貴重な体験をしたというわけです。どういうことかとお聞きしましたら、英語の授業をやっている学生たちが勉強に対してのつてこない、これは外国語の先生大方の共通の経験でしょうけれども、なかなか積極的に答えてもくれないし、わかっていないのかわかっていないのかもはっきりしない。どうも自分の教え方もあるのかもしれないけれども、教室での授業が活気がないと悩んでいた。そしてそういう学生たちですから、ネパールへ行っても外国語の点で心配だった。ネパールという国は一応ネパール語というのがあるのですけれども、それはやはり難しいですから、大体英語でいくしかない、そして向こうの大学生とも交流する機会があつて、英語で何とか話してくれたらいいのだけれどもどうかという心配を持ちながら、その先生は行かれたらしいのです。それで、実際に着いてみて、びっくりしたそうなのです。初めの二、三日



たちましたら学生が意外と積極的に英語で話していると。それは話していると言っても日本語交りとか、文法的には破格がたぐさんあったりして、正確な英語というのからはほど遠いのですけれども、それでも何とか聞かれたい話したりコミュニケーションをとろうとしているのが感じられてきた。そんなので少し驚いていましたら、一週間ぐらいたちましたら、初めべらぐらいだったのがべらべらになって、それで三週間ぐらいになったべらべらとめきめき目に見えるほどに上達していったというのです。それで、その人たちは四週間ネパールのカトマンズという町にずっと滞在していたわけですが、最後などというのはもう先生は脱帽という感じで、



「いやーこの子たちはすごいのだな、英語でもうネパールの人たちとコミュニケーションができています」。びっくりしたというのです。これは本当に教室では考えられなかったという事で、その先生にとっては大変うれしい誤算だったというのです。そんな話がつい最近ありました。

赤坂…ということは、我々はどうしても学習とか、教育ということを考えます。例えば一つの建物の中で、そしてその建物の中の一つの部屋、それは教室です。言ってみれば学校があつて教室があつて、先生がいて生徒がいてというパターンしか我々は描けないのですけれども、今のお話ですと、完全に学校というものもないし、教室というものもない。そ

ういった先生、生徒というものもない。そういうようなものを完全に逸脱したものではないですか。教室の概念といったものがくずされた感じですね。

### ネイティブ以外の人の英語

手嶋…それで、今のネパールの話は幾つかの問題を私は含んでいると思うのです。その先生もおっしゃったのですけれども、一つには教室から外に出て実地ということですが、それで教えたり教えられたりではなくて、本当に現実の場でのコミュニケーションというものを通して、身につけていくということがその一つなのです。それともう一つその先生が指摘されて私も同感なのですけれども、例えば英語という問題を考えるときに、私たちはよくイギリス人とかアメリカ人とか、いわゆるネイティブの人たちとの会話とか、英語の話ということをすぐ頭に浮かべるのですけれども、彼らはネパール人との間で英語を使って話をしたわけです。それでネパールの大學生、彼らにとっても英語は第二言語なわけです。そうしますと、日本人の學生にとっても英語は第二言語です。そうした、英語をネイティブとしない者たち同士が、英語という一つの手段を通してお互いに何とか意思を合わせようと、対等な努力をします。それは常々私も思いますけれども、私たち日本人がアメ

リカ人と会話をする場合には、初めから立場がもう対等ではないわけです。かなりわけないです。

ですから、そういうのと大分気分的にも違うし、実際的にも違いがあると思うのです。

しかし今英語というのは必ずしもアメリカの国の言葉とか、イギリスの国の言葉というところから離れて、もうインターナショナルな国際言語として定着してますね。何やるのでも世界中の人が集まれば、とにかく英語でやりましょうということになっていく時代ですから、そういう意味で英語も必ずしもアメリカ人やイギリス人のようなネイティブの人を当てにしない場合もあり得るのだし、かつてその方が私たちにとはとつきやすいというのはあるのではないのでしょうか。どうでしょう。

赤坂…まさにそのとおりだと思います。かつて英語というと完璧なアメリカ英語だとか、イギリス英語だとか言っていた時代はもう過ぎたと思うのです。この地球上に存在する国々で英語が使われている使用者数を考えてみても、恐らく三億になるのではないかと思うのです。三億の人たちが英語を話せると思うと、もちろん一億で三億ではなくて、勿論アメリカは二億数千万あるわけですし、イギリスとか、ヨーロッパの国々でも英語を使っている国があるでしょうし。それからオー



トラリア、ニュージーランドもありますし、そういったことを合わせると恐らく三億で済まないと思います。もちろん日本にも話者がおります。そういうことを考えますと、いろいろなパターンといいましょいか、いろいろな発音の英語というものが、そこに生まれてくるのは当然と思うのです。ですから、そういう意味で言えば今のネパール人とのダイアログというのでしょうか、会話というものを考える非常に力づけになる。我々に対しても。はお互いに外国語なのだ。ネパール人にとっても英語が第二言語とおっしゃいましたけれども、我々にとっても同じなのです。それを使って二つの国の人たちが意思が通じ会えたという、喜びは大きいと思うのです。

先生のおっしゃるように、アメリカ人とかイギリス人と英語で話をしていったら、それこそ太刀打ちできないのです。もちろんいろいろな形があると思うのですが、英語を本当に学ぶときに、我々は一体どういう英語を学んでいかなければならないかという問題を感じます。英語に限って言えば、そういう問題になると思うのです。

ですから、今のように教室の中でしかやらないというところに問題があるわけでしょう。教室の中だけではだめだから、海外旅行の機会を与えようというのが我々の考えなのです。外に出ていって、実際に話してみようということだと思うのです。

ですから、そういうことがアーティフィシャルにでも出来るような構造といいましょいか、パターンを作り上げていくというか、機会を作っていくというようなこともしなければならぬのではないかと思うのです。

### 実際の場で学ぶ

手嶋…英語教育の目標とか外国語教育の目的とかということは、よく問題にされるわけですが、それでも、それを一つと固定することは難しいかもしれないけれども、もしその英語とか外国語をコミュニケーションの手段というふうに置く場合には、やはりどうしても教室の中だけでは限界がある気がするのです。

先ほど先生がおっしゃったような教師と生徒がいて、その教師が生徒に教える、生徒は先生から習う、そういうふうな形で言葉の勉強というのはできるのかどうかというのが、基本的には私には疑問があるわけです。

そういう意味からすると、それを全くむだだとか、必要ではないということは全然言う気はないのですけれども、それだけでは何か十分ではない、そういう場合に何か別な方法とか手段が必要になってくるとしたならば、海外旅行ということが一つにはもっとも注目されなくてはいけないし、海外に実際に行って自分が使う立場になってみるということとは、どうしても必要になってくると思うのです。

それで、先ほどの例に戻ると、それでは海外旅行をすればいいのかということになってしまふと、初めの話にありましたけれども、バック旅行の例もあるわけですから、海外に出ればいいというわけではない。何とか自分でその国の人たちと話せるような、または話さなければいけないような機会を用意しなければいけないのではないかと思うのです。

赤坂…ですから、言葉の習得というのはお話のように、教室の中だけでやっているというのなら限界がありますね。例えばそういう中でマナーを教えるなどと言っても、そんなことはむしろ不可能に近いわけです。実際に向

こうの人たちがどういふようなマナーを持って、言動を行っているかということを見る必要があると思うのです。そうすることによって、「ああそうか、アイアムソーリー」という言葉は、ああいふ場面でああいふふうに使うのか」とか、いろいろなことがあるわけです。

ですから、そういうようなスイチュエーションを実際のスイチュエーションとして見た場合と、作られたもので教室の中でやったとしても、たかがしよせんあれば教室の中だというようなことにしか考えられないとしたら、これは徒労に終わってしまうというようなことになってしまうと思うのです。

そういう意味で言うと、実際に海外に行つて短期間でもいいからそういうものを見たり、触れたりということは意味のあることだと思うのです。

手嶋…それからひとつ考えるのですけれども、教室から出て勉強しようと言うと、私には修学旅行というのが思い浮かぶわけです。ありましよう、関西に行ったりいろいろなところに出かけていきます。中学生とか高校生、あれはやはり問題があります。教室から出て勉強するということは必要なのですけれども、あの修学旅行のパターンはマナーの上からいろいろなほかの意味からも、とにかく集団行動というの、悪い見本を習得させるような、あれが海外旅行でもそのままある意味で

はつながっているような気がするのです。

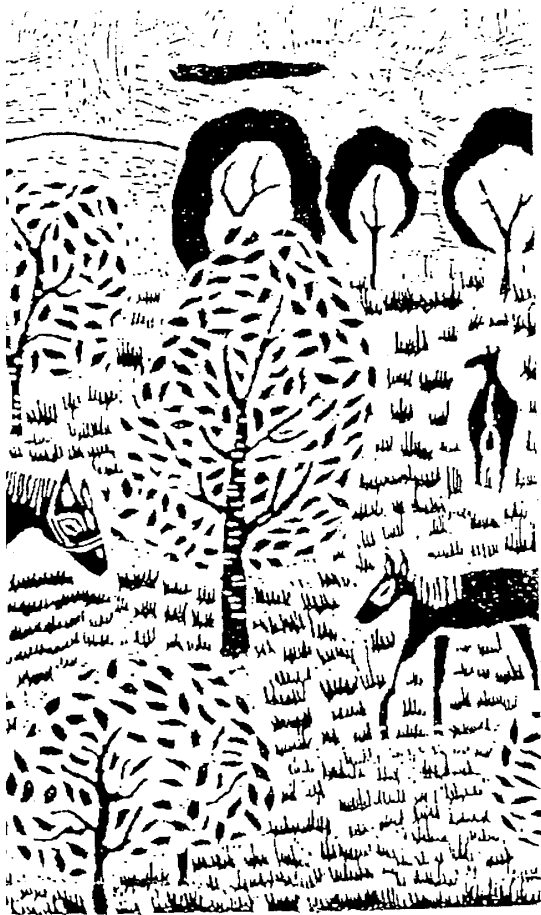
なぜ悪いかと言うと、多人数での集団行動というところではないでしょうか。日本人の悪い面がもろに出てしまうわけです。一人なら非常にマナーがいいし、親切な善良な人であつても、人数が多い中に入ってしまうと、ルール違反なりマナーの悪さも気にならなくなってしまうということがありましよう。

ですから、その辺どうなのでしょう。一つの解決策としては百人とか二百人という単位は余り進められない。せいぜい十人とか十五人とか、少人数で先生もその中に入つて一緒に行動していく、それで先生としてはマナーの問題も注意するなり、いろいろ考えさせるなりしていく。そういうふうなことも気をつけながらやっていくということが必

要なのではないでしょうか。

### 海外研修のあり方——人数の問題

赤坂…そうなつてきますと、お話を伺つて、あちこちの大学で海外研修というので学生を連れて行くことが思い出されます。私が知っている海外研修のあり方を見ると、そういう問題が何か浮き彫りになつてくるような気がするのです。送る方も受ける方もその中にはルールがないといけないのです。例えば何名行くのか、何名受けるのかという一つの目標がその中に入らないわけです。目標と言えるかどうかわかりませんが。去年は三十名でしたけれども、ことしは百五十名になりましたと言うような数の上での大幅な変化は教育上問題を感じます。受ける方はそれ



だけお金になるからいいのかも知れませんが、そういうようなことも問題を感じるわけです。やはり人数が少なければ少ないほどきめ細やかな教育ができると思うし接触ができるはずで、それが大多数になっていくと、たった一人でホームステイしてもらえたものが二人になったり三人になったという話をよく聞いています。本当の勉強に果たしてつながっていつているのかということも考えなければなりません。やらなかったよりはいいという程度のものになってしまうのであれば、お金をむだ遣いするような形になるのではないかなという気がするのです。

手嶋：先ほどから赤坂先生がおっしゃっているように、マナーの問題というのはベーシッなことから非常に大事だと思うのです。それで、それに含まれるのは態度の問題とか、生活の仕方という問題、過ごし方という問題でしようけれども、それと言葉というのはもう表裏一体だと思うのです。そういうものをひっくるめたものとして外国での日本人の姿だけというのがあるわけでしょう。ですから、言葉の問題だけを教室では教えるわけですが、それでも、そういうものだけが一人歩きして実際に現れるのではなくて、握手の仕方から始まって相手との対し方というのは、言葉の問題の中にすべて含まれているわけです。そういうことはなかなか教えられないわけです、



教室では。それをですから外国に行って実地にいろいろ体験しながら学んでいてほしいわけですが、それでも、その際に人数がたくさんなどというところ、そこまで先生の目も届きませんし、得てして多人数の中に埋没してしまう。自分も余り外国にいるということも自覚しなくなってしまう、日ごろの日本でのあり方をそのまま持ち込んでしまうような、もっと悪くなってしまうことがあります。ですから、人数を気をつけてみるというのは、非常に大事なポイントではないでしょうか。

赤坂：そうですね。ですから、そのためには例えば派遣する方と受け入れる方とのやりとりの問題になると思うのです。一番重要なことは、受け入れる方で私のところでは何名までは受け入れて、何名まではとにかくきち

とした教育ができます、そしてホストもカンファタブルにやってあげられますというような人数をまず出してもらうことが、僕は本当の姿、基本的な考え方だと思うのです。

そして、例えば三十名だということであれば、五十名の応募者があったときには、その中から選ばなくてはならないと思います。ことし五十名になったのだけれども全員を受け入れてくださいではなくて。やはり問題は受け入れる側のキャパステイティーの問題になるのではないかと思うのです。だって受け入れる方ではそこに語学の教育を行うプログラムがあるわけですから。それにホストファミリーの数もあるでしょうし、やみくもに海外に行っているいろいろな体験をしてこいというのではなくて、そこにはそれなりの厳



選もあっていいと思うのです。ことし行けなかったら来年行きなさいというような、そういうようなシビアなものがあっても、いいような気がするのです。

## 教室から外へ出る

手嶋…ただ外国へ行けばいいという時代ではもうなくなっているような気がするのです。

一つには先ほど言いましたどういうふうな形でいくかというのもあるし、もう一つにはどういうような気持ちでいくかというのがあるのです。もう本当に物見遊山とか遊びに行くとかという気持ちでいくのだったら、やはりそれはそういうものでしかないと思うのです。それはそれで楽しんで帰ってくればいいかもしれない。しかし本当に何かを獲得したいとか学んでいきたいとか、あるいは勉強したいとかいうのだったら、それなりのことをあらかじめ考えていかなければいけないし、そういうように用意されたものの中に入っていくしかないのではないのでしょうか。

私の教師の立場からするとやはりそういうものの中に学生なり生徒を導いてやるようにしなければいけないと思います。そのために初め私が言ったのは、ある程度の日数が必要だということ。それから次には人数のこと、人数もそんなにどっと送ってやればいいというものではないと思います。

それでネパールの学生の話聞いて、もう一つだけ思ったのですけれども、非常に彼らはその土地へ行つて、初めての経験が楽しかったわけです。見るもの触れるもの、マンダラというネパールの仏教画があるのですけれども、そういうのを習いに行ったり、ネパールの民族舞踊を学校に行つて教えてもらつたり、あるいはネパールの学生たちといろいろつき合つたりして、もう毎日毎日がうれしくて仕方がないわけです。そういうような気持ちにあると、言葉なんてものそれについてきてしまうのですね。結局無理に勉強するということではなくて、本当に毎日が楽しいから、そしてネパールの人たちと一緒にいたり話したりするのが楽しいから、だから言葉も自然に口について出てきてしまう、それはやはり最終的には一番大事なところではないかと思うのです。

だから、勉強のつもりでやるというのではなくて、何か毎日毎日非常に高揚した気分の中で充実した日が送れていると、言葉も自分の中にそれまで蓄積されていたものが自然に単語なり表現として出てくる。それは必ずしも完全な文章とか間違いない文章でないかもしれないけれども、もうそれでも通じさせてしまふし、相手もわかつてくれる。だからそこでよく最後は心だとか言うのですけれども、それはある意味では正しい部分含んでい

ると思います。そうした楽しい毎日というのかな、そういうような日々が送れたら言葉などというのは、もっともっと早く上達するという一つの例だったと思いました。

赤坂…そうですね。確かに海外に行くということには大きな意味があると思います、そういう意味で言えば、一歩外へ出てしまつたらすべてが勉強でしょう。そして楽しみでもあり、時には苦しみでもあったり、そして悲しみでもあるかも知れない。そういった色々なことを体験するわけでしょう。何日も過ごしているうちにホームシックになることもあるでしょうし、そうすると自分の親兄弟のことを思つたり、ボーイフレンド、ガールフレンドのことも思つたりするかも知れない。僕はそういうことがすごく大事だと思うのです。ですから、そういう意味で私は海外旅行をするということを肯定したいと思うのです。

手嶋…そのとおりです。もう少し大きな目で見ると、外国語教育だけではないのですけれども、教育というものの全体を考えた場合、私は大学にいますから、大学教育に限定してもいいのですけれども、授業というのは、やはり教育の一部分のような気がするのです。教室でやれることというのは、という意味ですね。今は外国の例でお話しましたが、ほかの科目とか分野においても、教室の中で先生が学生に教えることというのは、教育のすべ

てを覆い尽くすことはできないと思います。  
やはり外に出たり、あるいは課外とかそういうような教室の外にある時とか場を使ってやる、広い意味での教育ですね。それは先生と学生との接触も含めて、非常に大事な要素を占めているのではないかという気が最近しているのです。

ですから、外国語の場合でそれを当てはめればやはり海外へ行って、そうしたいいろいろな経験を積むということが非常に大事だし、それと授業というのをうまく組み合わせさせてやっていたければ、相乗効果が出るのではないのでしょうか。

## 海外体験の勧め

赤坂…本当にそうだと思います。ですから、そういう意味でやっぱり我々の教育の場というものをもう少し広げていく、そういうふうになっていくことになるのだらうと思うのです。非常に面白いお話に発展してしまったのですが、初め考えていた心配が何かどこかへ飛んでいってしまったような、話の発展に合ったのですが一つここで結論めいたものももう今既に出てしまったのですけれども、少し整理して終わりたいと思うのですけれども。日本人の海外旅行と外国語という大きなテーマがあったわけですが、かなり網羅できたとと思うのです。最初我々は海外旅行の観光

客が果たしてどういうパターンであったかというようなことから、我々の心の問題まで討論出来たと思うのです。

例えば、単なる旅行で飛んで歩いているだけでなくて、そこにじっとして、何か動かないものを見てみると、じっくり見てみるということも一つの勉強になることだと思いますし、それから先程トレーニングの話も出たのですが、本当に自分が何かをやって一生懸命汗水を流して行って、そして一つ一つ達成していくという、「あっ、自分はこれだけのが出来たのだ」という、それはただ単にそこを歩いているだけではなくて、いろいろな人たちと一緒に共に歩いているわけです。その中には外国人があり、同国人もいることだとは思っているのですけれども、そういう人たちの間で、いわゆるコミュニケーションです。やっぱりその中にはもちろん言葉でのコミュニケーションもあるだろうし、ノンバーバルなコミュニケーションもそこに出てくると思うのです。

そういうことと、それから今度は本当の意味の外国語学習。これは今英語に絞った話になってしまいましたけれども、確かに英語の学習というのは、教室の中だけで出来るものではないという結論だったと思うのですけれども。

手嶋…そうですね。だからと言って実際教室

の外、すなわち海外へみんなの学生が出かけしていくというのは、実際には大変なことかもしれないけれども、教師としては私は常々そう言ってるし、そうも思っているのです。

「君たち海外へ出るのはいいいことなのだから、できるだけ機会を見つけて出てください」、これも学生のうちはそれだけ自由だし、いろいろな意味でやりやすいわけだから、一回ぐらいせめて外国へ行くのはいいいのではないのと、それもバック旅行ではなくて、なるべく自分で苦労したり楽しんだりできるような形の旅行を考えた方がいい。それはいつもい言うのですけれども、そういうふうなことを聞いて実践してくれる人もふえています。だからそれはうれしいと思います。そして、必ずそうした海外体験をしてくれば、成果はありますから、それは目に見える形か目に見えない形かわかりませんが、絶対それはむだではないわけです、車に百何十万使うのだったら、やはり若いうちに一回海外へ出て、いろいろ体験してきた方が将来的にはずっと自分の財産になるはずですよ。

赤坂…それで常に思っているのですけれども、学生がそうやって海外体験をしていくということは、我々が教えられないものを学んでくるのです。我々だって海外に行くと、いつでも新しいものを学ぶのです。ですから、当然彼らだって同じような体験をするわけです。

しかし、それは違ったものを学んでるかもしれない。彼らが学んだものはひょっとして我々が教えられるものであるかも知れない。

そういう意味でいろいろな体験を海外ですてもらうということは、大変いいことだと思うのです。

手嶋…そのとおりだと思います。  
赤坂…本当にきょうはいいお話に展開できたと思います。本当にありがとうございました。

(註) 版画の小谷和義(こたにかずよし)氏は一九八九年、当時ホクレン農業総合研究所長在職中、オランダ・スキポール国際航空の機中にて不幸にも病に倒れ、アムステルダム大学の大学附属病院にて療養、奇蹟的にも助かり帰国。数年の闘病生活の後、版画製作に強い興味を抱き人生の生きがいを感じ、現在動く左手だけでの版画製作活動に没頭している。

(あかさかかずお／札幌大学外国語学部教授)

(てじまけんすけ／東北芸術工科大学教授)  
(版画・小谷和義)